# 東京都の文化施策を語る会（第１回）議事要旨

１　日　時　平成１７年２月２１日（月）午後3時00分～午後4時30分

２　場　所　都庁第一本庁舎25階 114会議室

３　出席者　岡本伸之委員、柏木博委員、平田オリザ委員、福原義春委員、太下専門委員

４　次　第

（１）開会

（２）局長挨拶

（３）委員紹介

（４）座長選任・座長挨拶

（５）意見交換

５　発言要旨

（１）山内生活文化局長挨拶

この「語る会」では、委員の皆様に東京都の文化施策について自由に議論していただき、提言していただきたい。

これまでの都の文化行政を振り返ると、昭和58年に全国に先駆けて文化振興条例を制定した。この条例に基づき、文化の視点に立ったまちづくりや国際文化交流なども盛り込み、さまざまな文化事業や文化施設の整備などに取り組んできた。

バブル経済崩壊後のいま、限られた財源を有効に、効率的に使うためにも、「語る会」で提言をいただき、東京都の文化施策を整理していきたい。

また、ＮＰＯなどをはじめとする民間団体、企業との連携をどうするか。国、自治体間の役割分担、東京都という広域的な自治体レベルでの協力・連携をどうしていくべきなのか、大きな課題が山積している。

文化施設では、福原館長をはじめとして文化会館、現代美術館といったところで民間からの館長を迎えて改革を進めている。

また、ワンダーウォール、ワンダーサイトなどでの、若手芸術家の育成、ヘブンアーティストなどの新しい試み、アジア舞台芸術祭などの国際交流も進めてきた。

その一方で、国においても文化芸術振興基本法が制定され、文化の振興を本格的に行うといった動きが出てきた。さらに、地方自治法の改正により、指定管理者制度が導入されることになり、民間企業なども文化施設の運営に参入することが可能

になった。そういった意味で、今、文化行政は転換期にある。

東京都としても、これまでの取組を総括して、将来を展望した文化施策のビジョンを示し、一層の施策の再構築を進めたいと思っている。

東京には、多くの文化施設や文化団体、アーティストが集まり、日々さまざまな文化活動を行っている。文化活動を支援する企業や団体も多く、江戸時代からの伝統文化も蓄積している。このような文化的資源を生かして、個性あふれる文化を創造・発信し、東京を活性化するために、都はどのような役割を果たし、施策を展開していくべきか、この会で専門家の皆様の忌憚のない意見を伺いたいと思っている。

（２）座長の選任

要綱に基づき、委員の互選により座長に福原委員を選任。

（３）意見交換

〇福原委員

日本の中では、町レベルでの町おこし、町を活性化するためにいろいろな文化施策がつくられてきた。豊かな生活をおくれる地域にしよう、住みやすい地域にしようという意識から、文化のことについても考えてみるということが、今、起きつつあるのではないか。

例えばルーブル、メトロポリタン、リンカーンセンター等を一つのシンボルとして、いろいろな運動がずっと永続的に行われている。

ニューヨークやロンドン、パリといった大都市と比べて東京の文化はどうなのか。

世界中からすばらしい演劇なり演奏、美術の展覧会なり、あらゆるものがたくさん東京に来ているのに、東京自体からの発信ができていない。

また、東京には千何百万人という人たちが住んでいるのに、その人たちが、果たして今のようなレベルのカルチャーに満足しているのだろうか。

戦争の世紀が終わって、新しい21世紀の、全く新しいライフスタイルをこれから構築しなければならない。

そのときに、中小都市は中小都市で頑張ることが国の力となる。

一方、大都市がそれに対して大きな役割を果たしていくこと、例えば、全国の人たちの発表の場となるとか、あるいはアジアの人たちが東京に来て、発表の場をつくるとか、いずれにしても、新しい時代の発信の仕方、あるいは、新しい創造の仕方を私たちは考えていく必要があると思う。

○岡本委員

私は、観光振興が専門ですので観光から３点ほど申し上げたい。

1つめは、その語源から「観光」というのは、その地域に固有の文化を、ホストはゲストに対して誇らかに示し、ゲストはその地域固有の文化を仰ぎ見てそこから学ぶということ。一言で言えば、異文化交流である。しかし、日本には、わずか500万人しか観光客が来てくれないため、文化が交流をして新たな発展に至る契機がつかめないでいるということ。

2つめは、それを促進させる基本原理は、「知らせて、見せて、また来たいと思わせる」こと。福原座長が館長をしている写真美術館がどこにあるのか知らなければ行きようがない。まずは知らしめ、本当に満足して「また来たい」と思わせるようにするということ。

3つめは、そのために東京の魅力である自由裁量性を最大限に活かし、観光客にとってさらに利便性を高め、その選択肢を豊富にしていくことが大切である。そのために東京の魅力のビデオをつくる、1枚でいろいろな所を回れるカードをつくる、といった具体的な施策も提案したい。

○柏木委員

若いアーティストが東京、ニューヨーク、ロンドン、パリから声がかかったとき、まず東京は外される。それだけ東京のステータスは低いと感じる。ステータスをあげるための解決策は、積み重ねが大切。

生活そのものに結びついた文化が重要であるが、デザインの専門家としては、生活にデザインや文化が意識されていないのが残念。好きな音楽や美術、インテリアといった話題が生活に根付いたものとして価値判断される英国などと比較すると、日本にはそういった土壌はない。小・中・芸術教育でもデザイン教育は行われていないし、海外にあるようなデザイン博物館が日本には存在せず、美術館で取り上げられる機会も少ない。消費者、生活者に、ある教養、リテラシーをつけてあげることにより、生活文化の厚みが出てくるのではないか。

○平田委員

文化政策では、今なぜ東京で文化なのかということを明確にしていかなくてはならないし、具体的なミッションをつくる必要がある。

欧米のどの国を見ても、スポーツを含めた文化によって社会を支えている。芸術

文化振興は、社会にとってのセーフティネット的な役割を果たすということをもう少し強く言っていくべき。

また、東京都の難しいところは大きすぎることと市や区との関係をどうしていくかということ。細かいことは全部区に任せればいいじゃないかと思う。

熊本県立劇場は、熊本県内の小さな市町村のホールが指定管理者制度に対応しきれないので、それらを指導する研修会を行ったり、県内の小さなホールの文化振興を支援するバックアップ事業を多数行っている。

いままで都の文化施策では、そういうことが余り行われてこなかったのではないか。

地域住民に近い活動は市区町村でやってもらい、都道府県は人材育成や、職員の研修などセンター的な役割を行うと棲み分けをしていくべき。

東京は、アジアのさまざまな国のアーティストにとって、あこがれの都市になるポテンシャルを持っているにもかかわらず、今までそういう政策をとってこなかったということと、多少、地の利とか言葉の問題もあり、工夫が必要である。

具体的には、

① 劇場とか美術館の評価の一つの基準として、入館者とか、どれだけ感激を与えたかということもあるが、海外からどれだけの見学者が来ているとか、海外からの研修生をどれだけ受け入れているか、そういうことも評価の基準となるのではないか。そういった意味では、東京芸術劇場が首都の劇場としての機能を果たしていない。

② いろいろな国のアーティストを招いての二国間交流が大切。

③ 文化政策をアートカウンシルみたいなもので方針を決め、評価もできるようなある程度独立した機関をつくる時期である。

○太下専門委員

観光や都市開発や福祉といった他の政策分野と連携し、文化を機軸に東京のイメージを考えていく時期ではないか。

東京都と区市、民間、企業メセナ等との役割分担が大きな課題。「補完性の原則」という言葉があるが、都は他でできないことを側面からサポートしていくべき。

都の役割は、通常、「東京都は何々をやります。」という政策の作り方がわかりやすいと思うが、「東京都は、こういう条件になった場合は、何々をしません。」という限定をつけて考えていく方向性もありではないかと思う。

また、文化マニフェストをつくり、都がなんらかに取り組むことによって、こういうことを目指していくと宣言できるような具体的な指標を検討していくべき。

○福原委員

先ほど柏木先生から、若いアーティストがどこで展覧会をやるかというときに、東京を選ばないのではないかとあったが、まさにその通りだと思う。

ただ、一つあった例では、クレア・ランガンというアイルランドの映像作家が、2004年じゅうに、テート、MoMA、東京で展覧会を、１年間のうち３カ所、地球上の代表的なところでやりたいと言って、最後に私たちのところにきたので、格が格段に落ちているというわけではないと思う。

それから、特にアジアの方にとっては、やはり東京がステージで、東京に出たら、次はニューヨークに行こうという段取りになっているところが多いようだ。

「語る会」では、アートカウンシルみたいなものがあったほうがいいのか、そういう大きな方向を考える。

あるいは、芸術劇場は今のままでいいのかという具体的な方向で考える。両方あると思う。

○柏木委員

生活にかかわる文化を味わえるような人々をつくっていくことで、劇場にも行くだろうし、美術館にも行くだろうし、文化施設も活性化すると思う。

送り手の側はもちろん美術館なり、アーティストなりも支援していかなければならないが、それを味わう人たちをどう育てるかということもかなり重要である。

あるとき、金沢の商工会議所から呼ばれて、金沢の漆器が全然売れないと。「デザインを変えて、もっとモダンなデザインにしたら売れるでしょうか。」と聞かれたので、「漆器を使うような生活者がいないだけです。」と言った。

送り手側のサポートだけではなくて、受け手側のサポートをやると、そこのところがかみ合って活性化すると思う。

○福原座長

伝統工芸というのは古いものをそのままつくり続けることではないが、伝統工芸のような分野を現代の生活の中にどう取り入れていくのか難しいところ。

例えば、畳のように、今になって洋風の家にわざわざ畳を敷くようなライフスタイルが出てくる場合もあるし、畳なんか要らないという家もある。

○柏木委員

伝統工芸だけではなくて、家具とか、さまざまな日用品のデザイン、音楽を聴くことなどが日常化して豊かになっていってくれると、活性化するのではないか。

○福原座長

いま私たちは何を考えなければいけないかというと、これまでの考え方で文化や芸術を、どう楽しんでもらえるのかということではなくて、次の時代にどういう人たちが育って、その人たちは何をエンジョイできるだろうかということを用意しておかなければいけないという気がする。

私は、先日の「東京ビッグトーク」のときに、東京は文化の香りがないと言った。

自分でも文化の香りをつけるにはどうしたらいいいかということの答えがないままそういうことを言っているわけだが、できたら、そういう抽象的なことであっても、それが魅力になるようなキーワードも皆さんに考えていただきたい。

○岡本委員

人々の出会いと交流の場として東京を機能させることが大事。そういう意味では、私はアニメフェアがとても気に入っている。アニメの世界の人にみんな集まれということで、東京都が毎年実施している。アニメ、デザイン、ファッションなど、いろいろな業界団体があってちょこちょこやっているのだろうと思うが、それらを全部束ねて、１年に１度、世界の冠たるフェアをやるようなことが東京都の役割。世界のデザインの関係者、ファッションの関係者が一堂に会して交流すれば、そこで新たな一つの契機が育まれると思う。

非言語系の文化の側面で何かしかけることはできないかと思う。

○太下専門委員

今後いろいろな分野の専門家の方をゲストに招かれると思うが、音楽の場合は、クラシック音楽だけではなくて、他の音楽分野の方もお招きいただきたい。クラシック音楽は、明治以降に日本に入ってきた舶来のもの、一方には伝統音楽があり、現代日本の我々の音楽は何なのかよくわからないなと私自身はいつも思っているので、ぜひ、音楽に関しては幅広にご検討いただきたいと思う。

○福原座長

提供する側だけではなく、受け入れる側として、ＮＰＯの代表でしかるべき人がいれば、話を聞きたい。